參同契寶鏡三昧組織

保坂玉泉

『參同契』と『寶鏡三昧』とはその形式內容共に相似てゐるから、古來姉妹篇として併用されて來た。形式的方面から云へば二つ共偈頌の形長篇詩であつて、『參同契』は二百二十字、『寶鏡三昧』は三百七十六字より成る極く短い語錄である。從つて頗る簡潔に禪の心要を賦說した名文である。又その內容的方面から觀れば、二者共に絕對一味の佛心即ち如是法を說くに、回互不回互差別即平等相對即絕對の妙理を以てし、『參同契』は「俱舍」「唯識」等の三科の法相を用ゐ、『寶鏡三昧』は「法華」「涅槃」等の文句教相を採用せる異りあるも何れも巧妙なる譬喩を以て佛心を說明し、絕對佛心の悟入を勸說すると共に兼ねて當時禪宗分派の流弊を救はんとしたのである。蓋し斯く兩者が形式內容共に符節を合するが如くあるは是れ蓋し『寶鏡三昧』は『參同契』の思想を繼承したものであるからである。故に古來之を記錄するにも讀誦するにも兩者を併用し、研究し註釋するにも同じく併用し來つたのである。

然るにその註釋に當つて『參同契』には科段を作り組織を考へたものが相當あるが、『寶鏡三昧』には全く之がない。『參同契』と同じく『寶鏡三昧』の註釋も頗る多く枚擧に遑あらざる程だが、後者の科段組織に就て一書も之に論及

せざることは前者と比較して甚だ奇異に感ずる。兩錄を併せて講讀提唱する場合に於て殊に然りであつて、『參同契』には科段を切つて說いたが、『寶鏡三昧』にはそれを缺くことになつては聊か片落の感なき能はず且つ甚だ不便である。實際上科段を切らずに講讀することは出來ないから、止むを得ず私案を以て間に合はせるより外はない。是れ屢々筆者の經驗したところである。

尤も禪錄の研究提唱等は他の經律論疏の研究の如き敎相學的に習ひ科段組織分科分解して觀るに及ばず、文字言句の組織に拘泥するは寧ろ敎者法師流のする所で必ずしも禪者の態度にあらず、禪者は言詮に依るも言詮に囚はれず直下に須く眞意を把握すべしと云ふ向があるから、吾人も『寶鏡三昧』の科段組織の必要を固執するものではないが、然し吾人は敎禪不二を本意と信ずるが故に禪錄を敎相的に研究することを不當とは考へない。既に姉妹篇たる『參同契』に三四の科段家があるのであるから、寧ろ之に對當して科段を作るのが當然で、古人が之を缺きたるを寧ろ恨とする位である。況んや「科半學」と云はるゝ程古來經錄の科段研究を重んじ且つ現今の組織的研究尊重の時代に於ては尙更のことである。『參同契』に科段を作したものは、宋、瑯琊洪覺範の『參同契科段』、明・永覺元賢の『洞上古轍』、天桂の『報恩篇』、指月の『參同契寶鏡三昧不能語』、千丈實巖の『杓木篇』、辻顯高の『參同契寶鏡三昧纂解』、山田孝道の『曹洞禪講義』等であつて、相當科段の研究があつた。此中覺範の科段は最古のもので、大科四段に分ち第二科を更に七小科に分ち全體に亘り精細に入り科段中完全なものである。『提唱略錄』には之を「辨二註諸書一大失二其宗旨一似二敎家科判一」と評してゐるが、以後科段の完璧がないから、それは依然として最善なものである。乃ち後の諸科段は何れも本文の處々に分科するに過ぎず、首尾全體に涉つて科段を施せるものなし。されば『纂解』はその名の如く『古轍』、『不能語』、『報恩篇』、『吹唱』、『杓木篇』の註解を纂集したものであるが、科段を作るにも同じく是等の諸

註書の分科を適當に補綴合集せるに過ぎぬ。最新の山田孝道師の分科は如上を參照せられたのであらうが獨創の所が多きに拘らず却て『參同契』の眞意を表はし得た上乘のものである。斯く『參同契』には科段があるが、『寶鏡三昧』には完く無之、今その缺を補ひその不便を除くべく拙作を顧みず左の如き私案を出したのである。此『寶鏡三昧』の科段は嘗て中央放送局に於て、朝の修養講話として放送するに當り餘儀なく作製したものであるが、姉妹篇たる『參同契』の科判も序に異曲同巧相對せしめたい感興から兩書共私案を出して見たのである。私としては思想的遊戯に驅られてのことで微瑕なきにあらずと思ふから勿論學者の斧正を乞ふものである。

組織井然科段精密は佛教經律論疏の一大特色であらう。禪籍は前述の如く必ずしも文字言句に拘泥せず從つて科段組織に關らざるが如きも、此『參同契』『寶鏡三昧』は然らず、文體韻文自由賦詠に拘らず組織實に井然秩序整正首尾一貫し、論理條然たるにも拘らず美辭麗句實に豊艶なる文學で、誠に禪文學中の白眉である。之を分科するは愈々その組織美を表はし益々眞値を現はすことを疑はぬ。仍て以下「參同契寶鏡三昧科段」を掲ぐ。

參同契

第一序文

(甲)佛心

竺土大仙心　東西密相付

(乙) 大道

人根有利鈍　道無南北祖

第二　正宗分

(甲) 本末不二

靈源明皎潔　支派暗流注

執事元是迷　契理亦非悟

(乙) 諸法不二

(イ) 事相

(一) 總說

門門一切境　回互不回互

回而更相涉　不爾依位住

（二）別說

(1)六境回不回

色元殊質像　聲本異樂苦

暗合上中言　明分清濁句

(2)四大不回互

四大性自復　如子得其母

火熱風動搖　水濕地堅固

(3)十二處不回互

眼色耳音聲　鼻香舌鹹醋

然於一一法　依根葉分布

（三）結說

本末須歸宗　尊卑用其語

（ロ）理法

（一）明暗不二

當明中有暗　勿以暗相遇
當暗中有明　勿以明相覩
明暗各相對　比如前後步

（二）理事不二

萬物自有功　當言用及處
事存函蓋合　理應箭鋒拄

（丙）會結

承言須會宗　勿自立規矩

第三　流通分

觸目不會道　運足焉知路
進步非近遠　迷隔山河固
謹白參玄人　光陰莫虛度

上聲六御七麌
去聲七遇
六御
「韻字交用」

上聲六御七聲讀
去聲六語御七遇韻

寶鏡三昧

第一序分

如是之法　佛祖密附。
汝今得之　宜能保護。

第二正宗分

（甲）如是法理論

（イ）如是法體

（一）實體

銀盌盛雪　明月藏鷺。
類而不齊　混則知處。

（二）識得

(1)離言絕慮

意不在言　來機亦赴。
動成窠臼　差落顧佇

背觸共非　如大火聚。

但形文彩　即屬染汚。

(2)依言說示

夜半正明　天曉不露。

(ロ)如是法用

(一)說明

爲物作則　用拔諸苦

雖非有爲　不是無語。

(二)譬喻

(1)不偏之喻

如臨寶鏡　形影相覩。

(2)無定相喻

汝是非渠　渠正是汝

如世嬰兒　五相完具。

不去不來　不起不住。
婆婆和和　有句無句。
終不得物　語未正故。

(3)回互之喻

重離六爻　偏正回互。
疊而成三　變盡爲五。
如莖草味　如金剛杵。

(八)如是法相

(一)回互之德

正中妙挾　敲唱雙擧。
通宗通途　挾帶挾路。
錯然則吉　不可犯忤。

(二)天眞之德

天眞而妙　不屬迷悟。
因緣時節　寂然昭著。

(三) 普遍之德

細入無間　大絕方所
毫忽之差　不應律呂

(乙) 如是法實踐

(イ) 迷妄

(一) 立宗之弊

(1) 立宗之相

今有頓漸　緣立宗趣。
宗趣分矣　即是規矩

(2) 法執

宗通趣極　眞常流注
外寂內動　繫駒伏鼠

(二) 說法之弊

(1) 說法之相

先聖悲之　爲法檀度。

隨其顚倒　以緇爲素。

(2)我執

顚倒想滅　冥心自許

(ロ)悟達

(一)方法

(1)成道

要合古轍　請觀前古

佛道垂成　十刼觀樹。

如虎之欽　如馬之驕。

(2)敎化

以有下劣　寶几珍御。

以有驚異　狸奴白牯

(二)結果

翠以巧力　射中百步。

箭鋒相值　巧力何領。
木人方歌　石女起舞
非情識到　寧容思慮。

第三　流通分

臣於君奉　子順於父
不順不孝　不奉非輔
潛行密用　如愚如魯
只能相續　名主中主